

## 『彼らが本気で編むときは、』

西松 優

日本映画研究者

2017年 スールキートス 127分

監督・脚本 荻上直子

出演 生田斗真、桐谷健太、柿原りんか

ミムラ、小池栄子、リリイ

荻上直子監督は、日常生活の中で、トランスジェンダーを通じて“人間にとって大切なもの”とは何かを描き、啓蒙映画でなく“やさしさ”の漂う優れた映画を作った。今までの作風とは大きく異なる映画である。

この作品は、母親ヒロミに蒸発された小学校5年生トモ（柿原りんか）が叔父マキオ（桐谷健太）・同居人でトランスジェンダーのリンコ（生田斗真）と3人で暮らす2か月間の日常生活を描く。

トモは当初リンコに嫌悪感を持つが、その人柄、自分への献身的な愛情を感じながら次第に心を開いていく。その中でトランスジェンダーというものを理解し、トランスジェンダーであるリンコや同級生のカイの気持ち次第にわかってくる。そして、リンコが受けた世間の偏見による悲しみや、やり場のない悔しさを糸を編むことによって封じ込めようとする気持ちにも共感して

いく。

荻上監督はトモという第三者の子どもを通してリンコを見つめようとする一方で、観客の一時的な感情に委ねることを避けるため、日常を淡々と積み重ね“客観性”を重視した。しかし、その視線はいつもやさしい。一方、観客の想像力も喚起する。回想では、小中学校時代、性に違和感を覚えて悩んだり、まわりから差別をうける姿が描かれるが、意図して一番の苦難の時期であった青春時代や実社会に出た頃は描かない。現在のやさしく、“真心”込めて仕事に取り組むリンコの姿から、乗り越えてきた苦難の日々を観客に想像させ“真実”以上の効果を出している。

監督はリンコの“やさしさ”をトモの中に色濃く反映させる。トランスジェンダーの同級生カイが自殺未遂をするが、トモは「あなたのママはたまには間違う」と寄り添い励まし、宝物にしていた幸運の硬貨を手渡す。そして、自分を捨て男に走ったシングルマザーの実母の孤独を思いやる“選択”もする。リンコの影響を受け相手を思いやるやさしい子に成長したのだ。

監督の思いは、マキオの言葉「リンコさんのような人に惚れちゃったらあとのことはどうでもいいんだよ」に凝縮している。最後は“性”ではなく“人間性”なのだ。ラストにリンコから渡されたプレゼントをトモが開けるが、そこにはリンコの“人間性”がくつきりと表われていた。

リンコの母、マキオ・ヒロミの母、カイの母、リンコ（疑似母）

と4人の母親の生き方、価値観、子への接し方を劇中織り交ぜ、母親に何が本当に必要なかを監督は観客にさりげなく問うているように見える。

桐谷健太と共に、実人生の落日前に輝きを見せる女優リリーの演技が光る。お勧めの一作である。

## 『花筐／HANAGATAMI』

村上 暁 スタッフ

2017年 PSC 169分

監督 大林宣彦

脚本 大林宣彦、桂千穂

出演 窪塚俊介、矢作穂香、常盤貴子

三年ぶりの大林監督の作品『花筐／HANAGATAMI』が公開された。2017年公開の中で、一番楽しみにしていた映画だ。

2016年夏、制作発表会。大林監督は末期の肺ガンで、余命半年であることを明らかにした。妻であり、プロデューサーである恭子さんは、「監督はがんばると言ってますから、最後まで仕上がるまで元気にやりきりますから、よろしくお願いいたします」と呼びかけた。

本当に完成するのか。完成したとしても、監督の諦めや無常感

が反映された映画になるんじゃないか。僕は心配だった。実際に映画を見て驚いた。若い。パワーがある。2時間50分、スクリーンから押し寄せる力に圧倒され続けた。映像・音楽・登場人物たちの叫び。まさに大林監督の映画だった。

映画『花筐／HANAGATAMI』は、2011年『この空の花―長岡花火物語』、2014年『野のななのか』に続く、戦争三部作。前二作は、現代が舞台の映画だったが、今作の舞台は昭和16年の唐津。3人の男子学生、3人の女子学生、一人の未亡人が登場する、青春群像劇。

映画の冒頭から、ハイテンションな映像・音楽で、「いつもの大好きな大林監督の映画だ！」とうれしくなる。白黒の映像にピンクの花びら。派手に登場する個性的なキャラクターたち。

オランダ帰りのお坊ちゃん、俊彦(窪塚俊介)。逞しい肉体の美男子、鵜飼(満島真之介)。虚無僧のようなひねくれもの、吉良(長塚圭史)。俊彦の従妹で病気の美那(矢作穂香)。美那の学友あきね(山崎紘菜)と千歳(門脇麦)。

俊彦のおばで未亡人の役は常盤貴子。若い女子学生たちに負けないう美しさ。

男は女を、女は男を、そして時には男同士、女同士で求め合う。各々のラブシーンは、控えめながらも官能的。

あきねが俊彦の頭に、千歳が鶉飼の頭に、それぞれ鉢巻きをするシーンがすばらしい。口紅で作る日の丸。その鉢巻きに勇気をもたらす男。一生記憶に残るであろう名場面だ。

唐津の海、月光、松林、その中に浮かび上がる男女。印象的な主題曲を奏でるハーモニカ、チェロと鼓の融合した音楽。こう書くのと、キラキラした明るい青春映画のようだが、夢のように美しい世界の中に、常に死の雰囲気を感じた。それは、舞台となっている時代が戦争と重なっているからだ。

この映画には原作がある。檀一雄が1936年に発表した『花筐』50ページにも満たない短い小説だ。

小説の中には、戦争を感じさせる描写はほとんどないが、大林監督は、映画の中に戦争の影を大きく取り入れた。

二人の息子を日露戦争で亡くした老婆。父と兄を招集され、家業を継ぐために勉強をあきらめる学友。色街の女たちが言う。「こんなきれいな若者が、戦争で死んでしまうんだ。」

青春を無理やり中断させられる若者たちの言葉が痛い。「いつかね、もう誰も死なない、殺されない日が来るといいね。」「青春が戦争の消耗品だなんて、まっぴらだ。」

「戦争反対!」と声高に叫ぶ者はいないが、戦争に対する嘆きが、映画のすべての場面に感じられる。

この映画の脚本は40年前に書かれていたが、大林監督は今こ

そ映画を作るべきだと判断した。戦争の影が、リアリティを持ってきている今だからこそ。

戦争が始まると、止めることができない。嘆くだけである。青春を奪われる若者たちと、愛する人を奪われる女性たちの嘆き。だからこそ、戦争が始まらないようにしなければならぬ。

日本は敗戦後、70年間平和を守ってきた。その平和を、今後も守れるかどうか、余命わずかな大林監督が心配してくれている。武器を持ちたがる人々によって、憲法や法律を変えようという動きが広がっているからだ。

大林監督からの贈り物であるこの映画を、我々や若い世代がどう受け止めるか。この映画を観たものの責任として、考え続けていきたい。

## 『あゝ、荒野』(前・後編)

林久登 スタッフ

2017年 スターサンズ 前編157分 後編147分

監督 岸善幸

原作 寺山修司

脚本 港岳彦、岸善幸

出演 菅田将暉、ヤン・イクチュン、木下あかり

ユースケ・サンタマリア、木村多江

2017年秋、邦画界に型破りの映画が現れた。前後編、合わせて5時間という、無謀というか壮大な作品だ。寺山修司の長編小説(1966年)を映画化したものだ。だが、最近批判の出ている興行上の理由で安易に二つに分けた作品と異なり、きっちり細部が描かれ、脚本もしっかりしていて、むしろこの長さは必然と思わせるものがある。岸監督と脚本を仕上げた港氏の作家的勇氣に敬意を表したい。

この作品は、当時の時代背景を2021年の東京オリンピック後の新宿に置き換えている。少年院を出所して来た新次(菅田将暉)、はオレオレ詐欺グループの内紛で、自暴自棄になっている。一方、韓国からやって来た対人恐怖症のバリカン建二(ヤン・イクチュン)は、父親からのDVに耐え切れずに家を出る。2人は、偶然、堀口(ユースケ・サンタマリア)が経営するボクシングジ

ムで一緒になり、新次は復讐の為、バリカンは内気な性格を直す為トレーニングに励む。新次はバリカンを兄貴と呼び他人同士だが兄弟のような関係になっていく…。

2人が、格闘技の世界へ入っていくことになった背景や、ボクシングのトレーニングの細部が丁寧に撮っており、観る側は彼らの世界に瞬く間に引き込まれていく。その新次はヤリマン女、芳子(木下あかり)と、偶然ある店では出会う。彼女は行きずりの男を誘い込んで金品を奪っている。2人はギクシヤクしながらも惹かれていく。菅田の鍛え上げた肉体とスレンダーな木下の裸体が躍動する、からみは見もの。新次、バリカン建二、芳子の3人は、皆家族は破綻している。彼らは親子関係をあきらめ、あるいは捨てられ独りで社会に飛び出してきている。まさにこの映画のタイトルを地で行く連中である。

終盤の新次とバリカン建二の20分に及ぶ死闘は圧巻。憎悪と兄弟愛の交錯する凄まじい闘いは、観ていて胸に迫って来るものがある。新次は父の自死の原因が建二の父にあったということをも母から聞いて知っているが、建二はそれを知らない。その憎しみ



菅田将暉

の差が勝敗を分けたとも見て取れる。意識が朦朧とする中で、それでも立ち続け、壮絶な闘いとなる。後半、およそボクシングスタイルからかけ離れたムチャクチャな殴り合いをする2人を見ていると、人間の愚かさや悲哀、そして時には滑稽な生き物の姿に見えてくる。母親であるよりも女であることを選んだ新次の母（木村多江）が、観客席から新次に向って「殺せ！殺せ！」と叫ぶショットは圧巻。自殺抑止の会や法改正のデモ行進も折り込み、今の時代の社会性もちゃんと撮っている。2017年の締めくくりにふさわしい素晴らしい映画。映画史に残る骨太の作品とみた。

今や、若手男優のトップを走り、八面六臂の活躍を見せる菅田将暉。前回の岸のデビュー作『二重生活』で出会って、リメイクをしない岸に惚れ込み、次回作が決まったら、又声をかけてほしいと言っていたようだ。だから今作への入れ込み方が違う。この映画の為に半年間ボクシングの指導を受けたと聞く。最初はバーベル20キロしか挙げられなかったが、80キロまで挙げられるようになり、見事な肉体に仕上がっている。

この直情的な新次に対し、対照的にストイックなバリカン建二役のヤン・イクチュルは素晴らしい。自殺抑止の会の女を助けたことで、親しくなりホテルに入る。だが、2人はうまく繋がらない、建二が勃たなかったのだ。好きになった女の求めに応えられなかった彼の痛切な絶望と孤独感が伝わって来る。健二はジムオ

ーナーとホモの関係にあったのだろう。（と、私は思っている）

「みんな、何処へも行かないで

僕はここにいますよ

だから、何処へも行かないで

僕はここにいますよ……」

彼のラストのモノローグは泣かせる。

あえて苦情を言えば、東日本大震災の罹災者芳子の母（河井青葉）の存在は鼻につく。いらぬのではないか。ちよつと人間関係が出来過ぎている。娘と別れっぱなしでいい。

前編は名古屋で観た。後編は岸監督を迎えてトークがあるというので伊勢の進富座まで出かけて行った。ところが電車の時間を間違って着いた時は、すでに映画は始まっていた。受付に行くところ「満員ですので、今からは……」と渋い顔。「四日市から来たんよ！何とかして……」と頼み込み、無理矢理入れてもらう。幸い後部の壁に並べてある補助椅子が一人分空いていた。こんな満席の館内は何年ぶりだろう。そして、もっと驚いたのは、エンドロールが出ると拍手が出たことだ。私も負けずと拍手をした。今、映像文化は巷に氾濫し、どこでも、いろんな手段で見られる。でも、



ヤン・イクチュン

映画はやっぱり暗闇の中、大スクリーンで見なくっちゃ、という  
思いを客席のみんなと共有した夜だった。

帰り際、岸監督と二言三言立ち話をする。隣にいたプロデュー  
サーの杉田氏は三重県出身ということだった。間違はなくこれか  
らの映画界を背負っていく2人だろう。今後の作品に期待したい。

## リングサイドストーリー

豊楽志夫 謎の青年

2017年 彩プロ 104分

監督 武正晴

脚本 横幕智裕、李鳳宇

出演 佐藤江梨子、瑛太

元々、デカパイでちよつと棘のある佐藤江梨子は大好きな女優  
だ。女として有利な武器を持ちながら、それをウリにすることな  
く、演技力そのもので勝負する姿勢がいい。それだけに、意地の  
悪い女、素直な女、どちらも演じこなす力を持っている。その相  
棒に瑛太。しかも監督が『百円の恋』の武正晴とくれば、見逃す  
わけにはいかない。

オイラは喜劇と言ってもスラップスティック喜劇は好きでない。  
しかし、こんなコメディは大歓迎だ。江梨子（カナコ）と瑛太（ヒ  
デオ）のキャラのぶつかり合い、堅気な女とダメ男の組合せは抱

腹絶倒だ。武の盟友でダメ男を地でいく足立紳の実話がヒントに  
なっているという。

男優のヒデオは役者としてのプライドが高く、気に入らない役  
は引き受けないので、なかなか仕事が入らず、カナコのヒモのよ  
うな生活を送っている。日頃から彼は「俳優ってのは、な、人に  
非ずって書くんや。人のやらないことをやるんや」と息巻いてい  
る。

そんな男がひよんなことから、カナコの手前強がってしまい、  
キックボクサーと勝負せざるを得なくなる。役者として虚構の格  
闘役を演じる気持ちで衝動的に引き受けたが、練習を重ねるうち  
に、現実の厳しさがわかって来る。しかし、もう後戻りは出来な  
い。

だが、彼の練習風景を見る限り、フットワークは軽く、その俊  
敏なシャドーボクシングはプロと変わらないように見える。ひよ  
つとして勝つのではと思わせる。当日会場へ、ロック音楽に乗っ  
てノリノリで入場して来るパフォーマンスはド迫力があり絶妙。  
笑い過ぎて涙が出る。そして、江梨子のために、役者としての一  
世一代の勝負にでる。結果は映画で、ご覧あれ。

佐藤江梨子は少々老けたが、独特の存在感がある。それに瑛太  
だ。この役者シリアスものから、コメディまで見るたびにあたら  
しい顔を見せてくれる。まさに変幻自在の俳優だ。